

研究活動報告

考古地磁気研究グループの大野正夫・北原優（九州大学）は、2025年8月7日から23日にベトナム社会主義共和国各地の研究機関や遺跡を訪問し、共同研究の打ち合わせや研究情報の相互共有、分析試料の収集、遺構の踏査などを行いました。

本調査での特筆すべき活動としては、ハノイ市のベトナム国家大学ハノイ校・人類学博物館にて行った、ヴォンチュオイ遺跡の出土遺物の分析に関する研究打ち合わせと考古地磁気分析用土器試料のサンプリングが挙げられます（写真①）。ヴォンチュオイ遺跡では2024年に発掘調査が行われ、擾乱のない各文化層より、先ホアビン文化期からホアビン文化期にかけて（前2000年～後1世紀頃）の4段階の土器群が連続的に発見されるという画期的な成果が報告されています。またフエ市のティンロイ城郭遺跡に赴き、フエ科学大学やフエ市歴史博物館の皆様とともに一部の城壁のクリーニングと構造の観察、建材レンガの帯磁率測定を行いました。同遺跡はベトナム中部でかつて栄えた初期国家・林邑の軍事拠点に比定される遺跡（一説として後3～6世紀頃）です。クリーニングの結果、城壁に使用されているレンガには複数のサイズ・材質のものが存在することや、城壁の基層部がラテライト質の砂利で整地されていることなどが明らかとなりました（写真②）。

なお本調査では、立教大学の山形真理子特任教授や金沢大学のグエン・ホアン・バク・リン氏をはじめとする共同研究者の皆様にご多くのサポートをいただきました。



写真①：ベトナム国家大学ハノイ校における研究打ち合わせ・分析用試料サンプリングの様子。
（撮影：山形真理子氏）



写真②：クリーニング実施後のティンロイ城郭遺跡における城壁の一部。（撮影：大野正夫）